

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	女性の分断とそれを乗り越えて：宮尾登美子『朱夏』を読む
Author(s)	王, 璇静
Citation	論叢 国語教育学, 19 : 23 - 33
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/54977
URL	https://doi.org/10.15027/54977
Right	
Relation	



女性の分断とそれを乗り越えて―宮尾登美子『朱夏』を読む―

王 璇静

一 問題の所在

一九四五年の日本の敗戦を境に、民族大移動ともいえる規模の「引揚げ」が始まった。引揚げに関しては、戦後の日本には膨大なテキストが残っていた。本論は、女性作家・宮尾登美子の『朱夏』（集英社、一九八五・六、初出：『すばる』、一九八〇・五～一九八五・四）を取り上げ、満州引揚げ経験の表出について検討する。¹

作者の宮尾登美子は、一九二六年に高知県で芸妓紹介業を営む岸田猛吾と愛人の子として生まれた。一九四四年には、同僚の教員だった前田薫と結婚し、満蒙開拓団の一員として家族で満州に渡った。長女を出産した後、敗戦したがための苦労を味わいながら、一九四六年に夫の実家がある高知へ引揚げた。²

『朱夏』の主人公である綾子は、一九四五年三月に渡満、敗戦の翌年である一九四六年九月に引揚げている。『朱夏』に描かれた体験と作家自身の体験は、多くの部分で重なっており、よく自伝的な作品として認識されている。

藤本千鶴子（一九八六）は『朱夏』に関して、主人公の綾子は世間知らずの少女であったが、働くことによって自立した女性になったことを指摘し、広い意味で「日本のノラ」と捉えられると主張している。さらに藤本は「幼い母綾子の満州体験」には、満州での「地獄の底をはいずり回るような体験」や、難民収容所での飢え、屈辱、疎外感の

中で、「変貌」し「目覚め」た物語が読み取れると述べる。藤本の論では、『朱夏』に表現された満州経験には被害的な側面があると解釈されている。³

波田野節子（二〇二〇）は引揚げ体験を語る文学作品を年代順に整理する時に『朱夏』に表れる加害の意識に言及した。例えば、綾子は「開拓団の周囲の村人たちから襲われる不安のなかで」、「満州人が警官に殴られて鼻血を流した光景を思いだす」。敗戦後の過酷な体験の中で、綾子は自分たちがこの地で抑圧者だったことに気づくという。⁴

近年盛んな引揚げに関する議論でも、ニコラス・ランプレクト（二〇二二）は作家論の観点から宮尾の経歴と創作の軌跡を考察している。この論では、『朱夏』は引揚げ時の最も深い「傷」である家族の病死や女性への暴行などについて間接的な語り方を用い、宮尾が他の作品で描いた難民生活の場面を流用していることが分析されている。ランプレクトは作品の内容から距離を置き、作家・宮尾が戦争の傷跡を持っていることを明らかにした。⁵

このことから、引揚げの傷跡に直面した宮尾が、それをどのように描いているのか、『朱夏』の作品内部の仕組みに言及しながら考察する必要があるかび上がる。

宮尾は多作な作家で、自伝的な作品、伝統芸や伝統美を描く作品、

歴史小説という三種類の作品を執筆した。⁶これらの作品は共通して、時代の大きな流れの中で強く生きる女性たちの姿を描いており、宮尾が一貫して、女性の生き方や在りように関心を持っていることがわかる。『朱夏』には、主人公の綾子だけでなく、綾子の視点を通して芸妓のつる子や、綾子と同じく教員の妻である利子など、複数の女性が描かれている。彼女たちの存在は、綾子の覚醒に対して重要な役割を果たしている可能性があるのではないだろうか。

現在までの研究では、綾子の境遇や宮尾の姿勢については議論されているが、作中の他の登場人物にはあまり触れられていない。石川利夫（一九八六）は『朱夏』は単なる満州での敗戦の記録や悲劇物語ではなく、綾子を中心とした「生活の極限状況におかれた周辺の人々の群像劇」と述べているが、「具体的に「周辺の人々」は何者なのかに關しては触れていない。

本論は『朱夏』で描かれた日本人女性に焦点を絞り、敗戦及び引揚げの表現を考察する。とりわけ、作中の視点人物である綾子の価値観や視点を通してほかの女性の存在のあり方を明らかにし、ジェンダーの視点から作品が暴いている戦争期および敗戦後の日本の社会構造を考察する。

二 綾子に与えられる女性観

『朱夏』はしばしば自伝的な作品といわれている。ただし、宮尾は一連の自伝的な作品を執筆する際、一人称の語り手ではなく三人称の語り手を用いている。また、自身の本名も使用していない。このことから、宮尾は体験者である自分と意図的に距離をとって登場人物の「綾子」を作り上げ、綾子を含めた周辺の人々の経験を巧妙に構成することで、日本植民者の満州引揚げ経験を再現したといえないだろう

か。作品に描かれた女性たちの姿、あるいは綾子が認識する女性たちの姿を考察する前に、まずは綾子に与えられた価値観、特に女性観について検討する。綾子が敗戦と引揚げを経験したことは、綾子の人生や価値観にとって大きな転換といえる。本節では、綾子の敗戦までの人物像に関して考察する。

綾子が富田家の一員でいる限り、親の職業はどこまでもついで廻る。そう考えれば家と縁を切るのもう結婚より他にはなく、それも嫌いな相手なら承諾はできないが、三好先生は好もしくやさしそうで、この人となら手をつないで父の威光の圏外に逃げおせられそうであった。

(一三頁)

とくに、岩伍は口数の少ない男だが、綾子の結婚に当たってただ一言、

「ええか綾子、お前の死に場所はこれで三好家と決まったぞよ」

といわれたことが綾子の骨の髄にまで彫り込まれており、しばらく病氣療養に帰っていた富田の家へ、いま再び帰りたいなどとは夢にさえ見えてはならないのであった。とすれば逃れる術は要のいる満州より他なく、いずれは向うへ渡る日を少しばかり早めても何の構うところがあるろう、と思うとふしぎに勇気が充ち、明日にでも汽車に飛び乗りたい思いに駆られてくる。

(三四〜三五頁)

綾子は生まれ育った家庭との縁を切るため、「三好家」の要と結

婚した。結婚後、綾子は「富田家の娘」の身分から離れ、夫の実家「三好家の嫁」となった。しかし綾子は再び「三好家」から逃れるため、満州に渡ることを決めた。つまり、綾子は従来の家族関係から脱出するため、満州に渡ったのである。その後、綾子は教員の妻として現地で生活する。教員の妻である綾子は、満州人を小間使いにするなど厚遇される生活を送り、時には子守りを日本人の学生たちにも手伝ってもらっていた。

渡満前の綾子が「富田家の娘」「三好家の嫁」という立場から脱出しようともがく様子からは、当時の女性が典型的な付随性と間接性を持ち、特に家庭という単位の中では付属的な存在と定義されていたことが明らかである。

また、綾子が生まれ育った家庭について語るとき、父親が重要な役割を担っていることは語られるが、母親の存在はほとんど隠されている。生まれ育った「富田家」を離れようとする綾子には、「三好家」の男性に付属して「三好家」に所属する以外の選択肢はない。

家族関係に潜む女性に対する差別や抑圧は個人的な現象に収まるものではなく、政治的な権力システムとして存在している。綾子の経験を通して分かるのは、社会において女性は男性に依存する（させられる）存在であるということである。これは、女性を男性の「庇護」のもとに置くことによって成立している「家父長制」の反映といえよう。女性は、社会に位置付けられる際、とある男性の娘、とある男性の妻というように位置づけられることが多い。綾子の在りようには、女性は直接的に社会に関与したり社会を構築したりすることが難しく、つねに男性に支配されてきたということが表れている。敗戦までの綾子は男性あるいは「家」の「庇護」下に置かれ、守られ、世間知らずにわがままに暮らしているが、同時に自立した

存在としての可能性を奪われてもいた。

このひと独特のささやくような声でいえば小林先生は正直に、「そうですか、召集免除はほんとうですか、僕は頭の上から爆弾落されるのがいちばん嫌じゃ。これは賭じゃと思うておぼあちゃん一人を残してこつちへ渡つて来た。僕がここでもし死んだらおぼあちゃんが困ると思ひよつたところですよ」

といえは松永先生も、
「僕は爆弾よりも内地の食糧不足がいやじゃった。満州へ行たら米の飯が腹いっぱい食べれると聞いて急いで飛び出してきました。着のみのままです」

と合わせていい、(中略…筆者)

綾子は血気盛んな小林、松永両先生が、教師としての自覚も持たず、内地から逃げ出す手段としてこちらを選んだことや、それをまた恥しげもなく人の前で話すことについて内心ひどく腹を立て、「何という女々しい男たち」とひそかに軽蔑した。

(一七〇―一七一頁)

教員である小林先生と松永先生が、満州に渡る動機を「召集免除」や「食料不足からの脱出」だと述べ、つまり渡満は内地から逃げ出す手段であり、自らの利益のために行ったのだと告白する場面である。このような考えに対し、綾子は「何という女々しい男たちとひそかに軽蔑」した。男性たちが利己主義的に渡満したことを、綾子は「女々しい」行為と捉えている。これを反転して考えるなら、仮に教員たちが教育による国家貢献などのような「崇高」な目的を掲げていた場合、彼らは真に「男性的」だということになる。そして、劣等的な特徴

として認識されている「女々しい」という表現は、女性を見下す行為や見捨てる行為に繋がっている。さらに、「女々しい」という評価の裏には、女性では国民として報国することはできないという認識があるのではないだろうか。このことから、綾子が女性蔑視の価値観を持つていると読み取れるのではないか。

個人的な経験は社会や政治構造と密接に関係している。日清戦争後に成立した良妻賢母思想は、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業を強化した。小山静子（一九九一）では、日清戦争後の世紀転換期において、家庭の女性役割が国家の発展に有意義と認識され、生産活動や兵役に就く男性と役割こそ違え、女性も間接的な国民として、国家的統合に組み込まれるようになったと指摘されている。だが、女性はいくまでも間接的な国民で、家庭領域内に囲われ、公共領域から排除されていた。こうした状況は綾子が生きていた一九四〇年代にも引き続き継続していたといえる。

綾子の男性教員の「女々し」さに対する軽蔑は、社会に普遍的に存在する女性への蔑視を反映しつつ、女自身がこのような影響を受けて、無意識に女性に対して嫌悪や軽蔑を持つようになることを表している。このような女性嫌悪の認識は生物学的なレベルにおいても綾子に付与される。

綾子が女中たちのなかでもとくにこのつる子と親密だったのは、年が五つしか違わなかったことと、それに十四歳の夏の夜、初潮をみたあと、まるめて机の隅に突っ込んであった汚れものをつる子がきれいに洗濯してくれてあったことから急に家の娘と使用人という隔てがとれてしまったのだと思う。綾子は真白に洗い落された、自分でも吐き気を催すあの腥い汚れものがつ

る子の手によってさし出されたとき、体が恥しきで高熱のあ
るように熱くふるえたことを思い出す。

（一三三―一三四頁）

ここで綾子が感じている「恥ずかしさ」は、社会に共通するジェンダーに対する認識を反映している。綾子は、無意識に社会から影響を受け、初潮という身体的な成長に対しても恥ずかしい事だと認識している。一方で、初潮で汚してしまった衣服を洗濯してくれた女中のつる子とは親しくなり、身体的な変化を共有している。このことから、『朱夏』は女性同士の間では、社会的な階級を超えた関係を築くことができることを示していることが分かる。

以上から、綾子は女性を付帯的な存在と認識し、「女々し」さを蔑視し、女性の生物的特徴を恥と認識していることが明らかになるだろう。しかし、女性の生物的特徴である初潮の経験に関するエピソードからは、女性同士では、社会的な分断を乗り越える可能性が示されたということもできる。

三 「純潔」と「汚濁」による女の分断

綾子の初潮経験のエピソードには女性嫌悪が示されている一方で、つる子との親密さも描かれている。とはいえ、女性たちは身体的なレベルでは経験を共有できるものの、階級や民族など社会的な属性によって分断されており、完全に共同的な存在ではない。

家の職業への嫌悪感とそれを平然と続けている父岩伍への侮蔑、
こういう汚濁のなかにいると自分も泥まみれになる、という苛立
ちは綾子を揺さぶってやまず、ある日、父には無断で代用教員志

望の旨を県視学あてに郵送した。

(十二頁)

綾子は、家の職業である芸妓紹介業に対し嫌悪感を持ち、芸妓たちの世界で「泥まみれにな」らないように、芸妓や家と関係を断絶するために、代用教員の志望を出した。少女時代から、綾子は芸妓たちが生きている世界は汚濁の世界だと思っていた。綾子の中では、女性は純潔な少女や妻、あるいは汚い存在である芸妓・娼妓といった二つに分断されている。作者である宮尾は「そういう家に育った人間の性感覚には、性を罪悪視するところがあります」と述べてもおり、綾子にはこの宮尾のいうところの性の「罪悪視」が投影されている可能性があるだろう。⁹

川村湊は、綾子の渡満を「彼女は自分の父親が売りとばした満州の日本人娼婦たちの身代わりでもあるかのように、困難な開拓地の生活へと自分を追いやっていった」と読み取り、「綾子なりの贖罪や反抗」と解釈した。¹⁰しかし、綾子が本土の家族関係から自分を解放するために渡満を決意したことは明らかであるため、渡満を綾子の「反抗」と捉えることはできるが、「日本人娼婦たち」への「贖罪」として読むことは少々強引な気もする。なぜなら、満州で綾子が入院した際の出来事を読み解くと、綾子が自分と日本人娼婦の間に線引きをしていることは明白だからだ。

満州に移民した綾子は病気にかけ、入院が必要になった。そこでつる子の紹介で「十仁病院」の「花柳病科・泌尿器科」に入院する。この出来事は、綾子が持つ女性に対する意識を考察する際に重要な経緯であると考えられる。

花柳病など何と侮辱したこと、と綾子は思った。いままで淋病菌に効く薬ばかり飲まされていたのだと考えると、腹立たしくて薬袋を破り捨てたかった。道理でいくら聞いても病名もいわず、いつ癒るかの見通しも立たなかったはずで、こんな汚らわしい病院になど、もう一日もいるのは嫌だと綾子は思った。

(二〇七頁)

綾子は、自分が花柳病つまり、芸妓にありがちな性病にかかっているのだと思われていることに気づいたとき、侮辱されたと感じ、怒りを感じた。そうと知るまでは「なつかしい電気があつて夜もいつまでも読書でき」と感じていた快適な建物は、「汚らわしい病院」になってしまった。綾子は自分の純潔性を守るために、娼妓とは厳密に境界を引き、自分と娼妓を区別しなければならなかった。この出来事からは、綾子が持つ「純潔」と「汚濁」の観念と、綾子が持つ女性の中の分断が明らかになった。

ところで、この出来事では「純潔」である妻たる女性も「汚い」芸妓の世界に陥ることが容易であることが、綾子が性病に罹患することを通して示されている。そして、綾子は綾子を「芸妓」と思っている「医者」や「看護婦」から「極めて冷ややか」に扱われる。例えば「診察のとき、こちらから痛みの去らないことを訴えても黙って答えず、すべて事務的に扱(二〇一頁)」われてしまう。このような状況は、芸妓たちが面している苦境を示している。綾子の体験や目を通して「芸妓」がどのような境遇に置かれているかが表されるのだ。

定期的に行なわれる遊里の衛生検査で見つけ出された芸妓の性病者は、病気の重さによって入院一ヵ月、二ヵ月、三ヵ月な

どと診断されるが、その間、寝て食べて仕事まで休めるのだからこの世の極楽だと皆よろこぶという。この治療費は抱え主の楼主が支払っても、結局は妓女自身の借金の額に上乘せされてゆくだけでなく、そのからくりは本人には知らされず、見舞に来る楼主に、

「お父さんすみませんねえ。遊ばしてもらって」と詫びるよし、綾子はいつか聞いた記憶がある。

(二〇八頁)

綾子が退院する際に、以前聞いた芸娼妓たちのことを思い出すシーンである。

芸娼妓は、「仕事」を通して性病にかかる。病気にかかれば「仕事」を休まねばならないが、彼女らにとつてそれは「極楽」だという。だが、治療費は芸妓自身の借金に上乘せされる形で清算されるため、実際は仕事を休めば休むだけ芸妓が苦しくなる仕組みである。こうした状況を知らされず、楼主に娼妓が謝るシーンは風刺的ですからある。そして、芸娼妓を性的に搾取している楼主が「お父さん」と呼ばれ、まるで家長として扱われている様子からは、娼婦たちが直面する複層の搾取を読み取ることができる。また、作中で背景化された娼婦が受けた抑圧が、読者の目前に押し出されてもいよう。

綾子の父・岩伍の商いの取引先に関して「国内から大陸へと伸びた」という記述がある。「日本軍の大陸進駐とともに芸娼妓の需要も急が増え、最初は玄界灘沿岸一帯にかけて勇氣のある女たちだけが出掛けていたものが次第に九州、四国に広がり、向こうは軍需景気に沸（一九頁）」いた。芸娼妓たちは汚い存在と見なされるが、彼女たちを利用する男性の日本軍士は「強く頼もしい」存在である。

『朱夏』には、関東軍に属している男性「悟」が登場する。「渡満する団員は皆、自分たちは関東軍が守ってくれるという大きな安心感があった（一七六頁）」とある通り、関東軍は現地の日本人を守る存在である。「悟」も、関東軍として現地の生徒たちに訓辞をする。しかし、関東軍は紛れもなく娼妓たちを性的に搾取する主体でもある。関東軍に搾取される娼妓たちは、満州での一般的な日本人という枠組みからは排除され、守られる存在ではなかったことが分かる。

芸妓とそれ以外の女性との分断以外に、芸妓たちと別世界にある女たちの中でも分断がないとはいえない。教員の妻であり女子師範の経験がある利子は、ある時、教師たちが食事をする際に「卵を茹でてもらいましょかねえ」と頼まれる。利子は「利子、ようわかりませんですけど、茹卵は割って煮ますでしょうか。割らずに煮ますでしょうか（一六七頁）」と尋ねる。綾子は、この利子の質問に「表情が強ばってしまふ。このシーンからは、「職業婦人」と「賢妻良母」の分断が読み取れるだろう。

綾子は女子師範附属小学校に通い、代用教員志望でさえいたが、「職業婦人」とはならず、教員の妻として渡満している。このような綾子の遍歴には、「この学校が自分の性格に合わなかったと判断した」為でもあるが、「潜在的には」父・岩伍の「職業婦人になつたらいかん、職業婦人というのは家のことは何にもできん。女として一人前じゃない」という発言が「作用していたのではな」いかと、綾子自身が振り返っている。そして、綾子は職業婦人である利子が茹卵の作り方をさえ知らない非常識さに「岩伍」の「いい分がよみがえってくる感」を覚える（一六七〜一六八頁）。こうした、利子の振る舞いに対する綾子の一連の動揺は、父による女性の職業選択への抑圧を、綾子が内面化した結果といえないだろうか。

四 綾子の覚醒

『朱夏』は、ある意味で綾子の成長の物語であるといえる。第一節で引いた藤本論は綾子に対し、「わがまま娘から飢えた野良犬へ、さらに働く喜びを知った女へという、綾子の変貌を見てきた。綾子の覚醒とは、逃れる生き方、頼る生き方の危さに気づき、女も働くことによって人間的に自立しなければいけない、ということに目覚めたことである」と指摘し、綾子の自立に関して、以下のように論じている。

女が「働く」ということが、さまざまな問題の突破口とされているのが特色である。綾子はものにこだわらない、後悔しない性格として設定され、ノラのように立ち止まって考えようとはしない。その点が物足りないが、作者としては、働くことが難問解決の力強い第一歩をふみだすことになる、と考えているのであろう。働くことで情報が入り、外の世界のしくみが見えてきて、人の心の痛みも徐々に見えてくるのかもしれない。¹⁾

女性は父や夫などの男性に庇護される一方で、自立できない付属的な立場に置かれた。これは、家長長制による女性への圧迫が露呈しているものである。したがって、「人間的に自立」することが「綾子の目覚め」であることは間違いない。ただし、綾子が「働く喜びを知った女性」として変化したとまとめることは、綾子の敗戦後の混乱の中の体験を単純化しすぎている可能性がある。

綾子の変化はおそらく、綾子が同じく教員の妻である利子が、現地の中国人に体を提供する代わりに食べ物を得ている場面を目撃したことを決定的な瞬間として始まっている。敗戦後、教員やその家族たち

は生き残るために食料や生活用品などを探し求め、集団生活を送っていた。次に引用する場面は、綾子が食べ物を探すために外出した先で見つけ、誰もいないと思つて入った、廃棄された共同浴場での出来事を描いている。

もう一步踏み込んだとき、綾子の目の前を白いものがすつと横切ったように思つた。白犬か、と目を凝らすと、今度はその上にかぶさるようにして綾子の視界を遮つたものがあり、それが見馴れた満人の青い長衫であるのが判つたとき、綾子は飛びのき、往來へと走り出た。

(中略・筆者)

あの白いものは、むき出しの女の腰、その上を覆つた青い長衫は満人の、それもガラスのなくなった戸のかたえに、毎日見馴れている汚れたふきんを敷いた楊の籠が置かれてあれば、容易にそれが市場の饅頭売りの男、と察しがつく。宮城子へ避難して以来、ターピーズ(筆者注…ロシア人)に凌辱される話を身ぶるいしながら聞いてきたけれど、たつたいま見た光景は、決して強姦ではないと思つた。

それだけに、綾子の心の奥底に沈殿している何かを揺すぶつた感じがあり、夫婦でいながら要との交わりはこの三月、内地を出発するとき以来、何もなかったことへつながってくる。風呂はもちろん、顔も洗わず、乞食同様の姿でいてそういう気になるものか、と思う気持もあるために欲望なども起らず、また相手の要も自分同様の感じかたであるうと思われる故にほとんど忘れ去っていた衝動を、掻き立てられた思いであった。

(中略・筆者)

見間違いだ、いや、確かに見た、と両者相せめぎ、そしてあの行為をどこか嫉んでいるらしい自分を発見して愕然とする。

もし利子だとすると、いままでもあの浴場でそうした行為をし、代償として饅頭をもらっては空腹感をしのいでいはいはしなかったかと思うと、それはいまの場合、性の相手を得ていること以上の猛烈な嫉妬であった。

(三八九―三九〇頁)

綾子が目撃した男女の性行為に対する描写や綾子の認識について、いくつかの重要な要素が指摘できる。まず、女性の体を「白いもの」「白犬」と表現することは、女性を動物的な存在として扱い、人間性を無視する表現といえよう。このような表現は、女性の性的な被害や搾取を容認する視点を反映していると解釈されるのではないか。

そして、綾子その状況を「決して強姦ではない」と認識していることにも注目したい。綾子が引揚げまでに満州で遭遇した、開拓団の悲惨な状況において、日本人女性が陵辱される話は珍しくない。しかし、この場面の性的被害は、綾子から見ると「強姦」とはいえない形態であるばかりか、利子が男性と性的な関係を持ち、代わりに饅頭をもらうことに対して嫉妬さえしている。綾子の日常は戦争によって崩れ、身なりを整える余裕もなく、集団生活の中では、夫と性的関係を持つことも出来ない。そのような綾子にとって、利子が性的相手を得ていることに嫉妬を感じるのには理解できることもある。

そして、利子が饅頭を貰っていることに対する綾子の嫉妬は、それ以上のものである。この場面は、戦争が人々の日常生活を根底から揺さぶり、飢餓や生存のための苦闘を強いることを、利子を通して示唆している。すなわちここでは性的相手がいることと空腹を凌ぐことと

いう綾子の二重の嫉妬が描かれている。「性の相手を得ていること以上」という表現によって、戦争が日常生活を崩し、敗戦後の日本人女性が生きるために多大な犠牲を払っていることを前面化した。

綾子がこの場面を目撃することは、更に大きな意味を持っている。綾子は、利子が「満人」に体を売ることを目撃し、しかもそれが「強姦ではない」と認識することを通して、今まで自分が蔑視していた娼妓たちの被害の側面に気付く。

敗戦前、綾子はある子の夫——妓楼楼主の山根に対し「私たちはお金儲けるために満州へ来たがじゃありません。こちらの開拓団の子供の教育のために自分から希望してやって来たです」と言っている。しかし、敗戦後の綾子は、「師範出の女教師で、人妻の利子」が、「満人」に体を与えることで食料を受け取るという、娼妓さながらの行為をしていたことを目撃する。綾子は「あの人は許せない、教師たちの集団の汚点だ」と、利子を軽蔑する。しかし後の場面では、自分が「犬がぐわえていた豚肉を取り上げて食べようとしていることこそ、もっと卑しい行為ではないか」とはっとする瞬間が描かれる。

このような経験によって、綾子の中の、女性を「純潔」と「汚濁」に二分する価値判断は崩れてしまった。飢餓を経験し、無一物の敗戦国の国民となった綾子は、娼妓のように生き延びることを「汚い」と思う考えを捨て、むしろやむを得ない選択肢であることを理解した。

やっぱりあの共同浴場のうしろ姿は利子だったといういまさらながらの驚きと、そして、いうように何にもないよりは、体を提供してでも饅頭を得たほうがこの集団にとって利益である、という考えかたに綾子は強い衝撃を受けた。

(三九九頁)

夜になり、集団生活をしている教師及び家族が皆集まり、各自が狩った獲物を報告する時、利子は懐から饅頭を取り出した。集団の人たちは、饅頭だけでは何もできないと不満を口にしたが、利子は「あら、饅頭じゃわるいですか。何にもないよりはましでしょう」と言った。利子が自分の体を提供することで受益するのは利子だけではなく、集団全体である。綾子が考えるように、利子が「教師の集団のつら汚し」であるとしても、集団の利益のために自分を犠牲にすることは、利己主義的に渡満した男性教師たちとは正反対の、無私の行為だといえるのではないか。綾子の意識の中で、「妻としての女性」と「娼妓としての女性」の純潔と汚濁の境界線が崩れた場面といえる。

全員無蓋車に乗り込んでも汽車はなかなか出ず、遠巻きにしている満人たちを眺めていて、綾子はそのなかに日本人女性が二、三人いるのを見て目を疑い、隣の要に小さな声で聞いた。

「あのひとたち日本人じゃない？」

「そうやろ。ピー屋の女は残るといいよったから」

と要はこともなげにいったが、綾子は驚きのため動悸が昂まり、伸び上ってそのひとたちの全身を眺めた。

いずれもプリントのブラウスにストラックス、とあっさりしたなりで、年の頃は二十から三十までと見えたが、化粧つ気もなく、要にそういわれなければ、これが春を売る職業のひとつとはどうい見分けられなかった。

この地の日本人は全員引揚げ、あとには誰も残らないというのに、このひとたちは一体何故われわれと一緒に帰らぬ、何故に残る、残って何をする、ピー屋で満人相手の商売をいつまで、何故

に続けるのか、また親兄弟はどこに、と疑問はつきからつきへ湧き、それを要に話そうにも膝詰めの間隔では口にすることもできぬ。敗戦以来、帰国を唯一の希望として生きてきた綾子には、この満州の地から同族すべての人間が引揚げのちもなおピー屋に働くという、そのひとたちがこの上もなく不思議で、またむごくも哀れにも思えた。

(五七九―五八〇頁)

引揚げの汽車から、まだ乗車していない日本人女性を見つけた綾子が夫に尋ねると、要は「ピー屋の女は残るといいよったら」と「こともなげに」答えを返した。綾子は、教師の村田から、敗戦後「ピー屋の女たちが立上って、＼ターピーズはあたしたちが引受けました。素人のお嬢さんがたを犠牲にしたらいかん」というて、身を挺して兵舎へ通いよるそう(三二五頁)という話を聞いてもいる。娼妓は自らを犠牲に「素人のお嬢さん」を守っているのである。性的搾取の被害者であり、自らを犠牲にしてもいる娼妓たちに対して、綾子はもはや蔑みの感情を向けることはなく、「むごくも哀れにも」に感じている。そして、『朱夏』は、綾子の心理状態を通して、読者あるいは戦後日本に、「ピー屋の女」たちの境遇を問いかけてくる。「何故に残る」、「残って何をする」、「親兄弟はどこに」。

だが、綾子は娼妓たちが満州に残ることを不思議に思うものの、娼妓たちが日本に戻ったとしても、満州にいる現状から環境が改善されるという保証はないどころか、おそらく現地に残る事より苦しい生活が続くのではないか。

そして、夫の「要に話そうにも膝詰めの間隔では口にするのもできぬ」という記述は、男女の分断を象徴するものとして捉えられるの

ではないか。

五 結び

『朱夏』は、日中戦争期から敗戦引揚げまでの背景を描き、細かく女性像を描写することで、家長制度下での女性の立場や、女性が内面に抱く女性嫌悪を明らかにしている。そして、主人公の綾子の視点を通じて、女性がそもそも劣位の位置にありながら、その中で、さらに娼妓である女性とそれ以外の女性とが「汚濁」「純潔」の基準で分けられることが強調される。また、妻としての女性にも社会によって多くの束縛が加えられ、抑圧されている。この小説の優れた点は、満州の歴史的背景を反映しつつ、女性が直面する困難を描写し、主人公である綾子が、女性が直面する共通の問題に気付くことを最初のステップとして女性の覚醒を示し、女性内部の分断を意識し、批判することを示唆していることである。

また、本作は綾子という世間知らずの女の目線を通して、植民者としての加害性と、敗戦国の国民、女性としての二重の被害性を織り込み、敗戦と引揚げ経験を描いた。女性は権力関係で支配される側に置かれたため、男女関係を描くことは、支配と被支配の権力関係を描くことでもある。

敗戦までの綾子は、女として自立してはいないが、付属的な存在として優待を受けた。楼主の娘として、金銭的な面でも富裕な生活をしてきた。満州に渡っても、日本人教員の妻として、現地の人々を手伝いとして雇うことも出来た。敗戦までの綾子は、妓楼の娼婦たちにも、現地の満州人にも、あまり関心を持っていなかった。敗戦後、綾子は日本人の国民として優位性を失い、支配される側になった。敗戦国の国民として飢餓を経験したり、日本人女性が食べ物のために身売りす

る場面を目撃したりすることで、被支配者の立場から戦争を認識することになった。ここに至り、綾子は過去の抑圧者であった自分に直面しなければならぬ。敗戦前の綾子は、実家の芸妓紹介業に嫌悪感を持ちつつ、娼婦を搾取することで、物質的に恵まれた特権階級の生活を享受していた。これは植民地政策の隠喩として読むこともできるだろう。渡満した日本人が支配者として生活できていたのは、無数の現地人を抑圧していた結果だった。例えば、綾子は満人の苦力の悪臭を蔑視し、自身の清潔さを保つために、満州では水が乏しいにもかかわらず、大量の水を使用して風呂に入った。この時の綾子には、日本人は純潔な世界におり、現地の満州人は汚濁の中で生活しているという考えが窺える。

しかし敗戦後、綾子は「女性とも見えぬほど汚れ」てしまう。このような支配と被支配の権力関係の転倒の中、綾子は自身が加害者側に立っていたことを自覚した、あるいは、植民者の日本人は加害的な存在であることを自覚していったといえるのではないか。

注

- 1 本論文の本文引用は『朱夏』（新潮文庫、一九九八）による。
- 2 宮尾登美子の経歴は「宮尾登美子の軌跡」『宮尾登美子の世界』（朝日新聞社、二〇〇四、一三六―一四三頁）からまとめた。
- 3 藤本千鶴子「宮尾登美子「朱夏」―幼い母綾子の満州体験」『国文学・解釈と教材の研究』215（学燈社、一九八六、一一七―一九頁）
- 4 波田野節子「引揚げ―日本への移動加害と被害の意識を中心に」『国際地域研究論集』（JSRD）第二号（国際地域研究会編、二〇二〇、九―一六頁）
- 5 ニコラス・ランブレクト「宮尾登美子の満州体験と帝国の傷跡―語られ

る引揚げ、想起する苦しみ』『戦後日本の傷跡』（臨川書店、二〇二二、三六～五一頁）

⁶ 高橋治「宮尾魔術が持つ雄大な構想」『宮尾登美子の世界』（朝日新聞社、二〇〇四、一一〇～一一四頁）宮尾登美子の作品に、三種類に分けられると言われている。第一は、『權』、『春燈』、『朱夏』や『仁淀川』の自分の人生に重なっている作品である。第二は、『一絃の琴』、『伽羅の香』といった伝統芸、伝統美などを描くものである。第三は、『天璋院篤姫』、『クレオパトラ』、『平家物語』といった女性を主人公としての歴史小説である。

⁷ 石川利夫「ファンゴールの真只中を生きて——宮尾登美子「朱夏・上・下」を読む」『時の法令』（1274）（雅粒社、一九八六、四四～四六頁）

⁸ 小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一）

⁹ 水上勉、宮尾登美子「語り」『文学の根』（対談）（『海』141）、中央公論社、一九八二、二四八～二六二頁）二五四頁

¹⁰ 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、一九九〇、一九八頁）

¹¹ 藤本千鶴子「宮尾登美子「朱夏」：幼い母綾子の満州体験」『國文學・解釈と教材の研究』315（學燈社、一九八六、一一七～一九九頁、一九九頁）

（広島大学大学院博士課程後期三年）